

0 2	一宮	千秋中学校	ハナキ マサヤ 名 前 花 木 柁 哉
分科会番号	0 2	分科会名	外国語教育

研究題目 主体的・対話的で深い学びの実現を目指して
ー英語で自分の考えを伝える力を養う授業実践を通してー

1 主題設定の理由

平成 29 年告示の学習指導要領では、外国語科の目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す。」としている。また、コミュニケーションを図る資質・能力として、①理解する、②表現する、③伝え合うの三つの要素を明示することにより、単方向だけでなく、双方向のコミュニケーションが重視されている。そのため、生徒が外国語で表現することができるようになるためには、適切な言語材料を選択し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えを形成し、再構築する経験を得ることが重要である。

令和 5 年度に実施された「全国学力・学習状況調査」（以後学力テスト）では、英語の「話すこと」や「書くこと」における無回答率の高さや低正答率が課題とされている。国立教育政策研究所（以後国研）の集計結果によると、「話すこと」では、問題番号 2「社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を述べる問題」の正答率は 4.2%、無回答率は 18.8%であった。「書くこと」では、問題番号 10「日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く問題」の正答率は 7.7%、無回答率は 20.9%であった。以上の結果から、「書くこと」「話すこと」とともに、相手を意識して自分の考えを伝えたり、その理由を表現したりする能力が十分身に付いていない生徒が多いことが想定される。さらに、令和 7 年度愛知県英語教育改善プランでは、「言語活動を通して英語によるコミュニケーションに積極的に取り組み、主体的に英語を学び続ける生徒の育成」が目標として掲げられている。その中で、改善が必要な内容として、言語活動の実施に関して教師と生徒の受け止め方に差があることが挙げられている。これは、言語活動を実施することを前提として、その言語活動に対する生徒の意味づけが重視されてきていることが想定される。そのため、教師が生徒の資質・能力を高めるために言語活動を実施することにとどまらず、生徒自身が活動の目的を理解し、その内容を自分事として捉え直して活動に取り組むことが必要だと考えられる。そこで、本研究では、授業において技能統合的な活動を継続的に実施することによって、生徒の「話すこと」「書くこと」の能力の変化を明らかにする。

2 研究のねらい

(1) 目指す生徒像

「読んだことや見たことをもとに、既習表現を活用しながら自分の考えを英語で表現できる生徒」

(2) 研究の仮説

表現活動において、読んだ内容やそれに関わる自分の考えを他者に伝えることを継続的に実施すれば、生徒の「話すこと」「書くこと」の能力が向上するだろう。

3 研究の方法

(1) 研究の手立てと実際

研究の具体的手立てとして、次の3点を実施した。

ア <手立て 1> 帯活動として行うピクチャーディスクリプション

授業最初の帯活動として、ピクチャーディスクリプションをペアで行った。流れは以下の通りである。

- ①電子黒板に食べ物やキャラクター、教科書で学習した単語などの写真を3つ示す。
- ②ペアになり、一方は電子黒板に映された写真を見て、もう一方に英語で説明を行う。
- ③説明を聞いている生徒が何のことを伝えているのかを当てる。
- ④一方のペアの説明が終了したタイミングで、教師から既習文法が含まれた英文を紹介したり、生徒が活動中に使用していた英文を紹介したりする。

- ⑤別の写真を使用し、役割を交代してもう一度行う。

食べ物やキャラクターなど身近な題材だけでなく、教科書で学習した単語をお題として設定することで、生徒の現状に合わせてタスクの難易度を調整することができる（例：気候変動、エシカルなど）。また、教師から特定の言語材料を用いて説明するよう伝えることで、既習の言語材料と何度も出会う機会を意図的に設定した。

イ <手立て 2> 単元終末のパフォーマンス課題

各単元終末に、それぞれの単元で扱った題材に関するパフォーマンス課題（Unit 1：日本のポップカルチャー、Unit 2：エシカルな商品、Unit 3：絶滅のおそれのある動物、Unit 4：世界の災害とその防災、Unit 5：自分があこがれる人、Unit 6：地球市民としての在り方）を実施した。各単元はおおよそ10時間完了で構成し、9時間目にパフォーマンス課題の準備を行わせた。発表は、各単元で扱ったテーマについて作成したスライドをALTと教師に見せながら自分の考えを伝えることを目標にして実施した。

Unit 1およびUnit 2のパフォーマンス課題では、生徒が作成した発表原稿に教師からのフィードバックを行わなかった。実際の英文を確認すると、言いたい表現を英語に翻訳し、未習の語彙や文法を出力された通りに使用する生徒が多く見られた。そのため、聞き手であるALTと教師は伝わりやすさという観点において大きな課題を感じていた。

そこで、Unit 3からは教師からフィードバックを受けて本番のプレゼンテーションを行うようにした。また、翻訳サイトを使って難しい表現を使用している生徒には、内容を大きく変えず伝えたい内容が伝わるような平易な表現を紹介し、本番の発表に生かせるよう指導した。

以下の【資料 1】は実際に生徒が書いた下書きと教師からのフィードバックの例である。Google Classroomに課題を配付し、生徒が期限までに提出することで、教師からフィードバックを受けられるようにした。文中の四角で囲われた部分は、教師が生徒の英文を修正した箇所である【資料 1】。また、導入、事実、取り組み、まとめの構造をわかりやすくするために、色を使い分けて原稿を作成したり、教師から事前に提示した例文を自作の英文に活用したりする生徒も見られた。

また、生徒が提出した課題に対して、内容面や文法、語彙に関する提案や、本番に向けての

期待などのコメントを一人一人に入力した。これは、生徒が英語でパフォーマンス課題に取り組む際の不安を軽減すること、生徒が考えていることを肯定すること、教師と生徒の関係性を構築する一助とすることを目的として実施した。

I'd like **to talk about** Easy Japanese.
When a disaster happens, Japanese is difficult for foreign people.
At that time, we also **used** Easy Japanese.
It means to speak slowly and tell things in Japanese.
We also use short words and simple sentences.
So, it is easy for foreign people to understand information about disasters.
It can help foreign people and save lives.
I think it is important for everyone to use Easy Japanese.

教師による
フィードバックの例

Today, I want to tell you about the very big earthquake in Indonesia in 2004. It's called the Sumatra earthquake. It is said that it was the third largest earthquake in the world. The earthquake caused a tsunami that killed 220,000 people.
After the earthquake, various countries began to help the affected areas. For example, the United States sent naval hospital ships.
I learned that we need to deepen our **deepening** understanding of tsunamis.
I was surprised to find that this earthquake was **that an earthquake** bigger than the Great East Japan Earthquake.

限定公開のコメント

花木 花木 先生
10月27日 17:07

簡単な日本語の使用について書いているのがいいですね。資料を参考にして、自分の考えを書くことができます。本番に向けて練習がんばりましょう。

【資料1】 パフォーマンス課題に向けた準備における教師からのフィードバック

事前に教師からパフォーマンス課題のフィードバックをもらうことについてどのように感じているか、Unit 4 のパフォーマンス課題終了後に、オンラインアンケートツールを用いて自由記述式のアンケートを実施した。ほとんど全ての生徒が事前のフィードバックを肯定的に受け止めていた。以下に、生徒の記述の一部を抜粋して示す。

- ・先生に見てもらってからの方が安心してテストに臨める。
- ・自分が作った文がうまくできているか、不安なのでこの方法は自分にとって良いと思った。
- ・こんな表現の仕方もあるんだ、この単語を使ってもいいんだ、とかなり勉強になるので、結構いいです。
- ・間違った文法や難しい単語から簡単な単語へすることを提案してくれるのでより万全な状態でスピーキングテストに臨めると思う。

以上のように、多くの生徒はパフォーマンス課題の発表前に教師からフィードバックを受けることで、発表における英語での発話に対する不安を軽減し、既習事項への気づきが促されることなどに意味があると捉えていることがわかった。

Unit 6 の「What does it mean to be a global citizenship?」の単元では、3~4 人グループになり、「地球市民とはどのような意味であると考えなのか」について発表し合った。グループで発表した後、数名の生徒が全体の前でスライドを示しながら発表する活動を行った。4 月当初は全体の前で発表することに否定的な生徒が多くいたため、全体発表の場は設定しなかった。最終単元の Unit 6 では、全体発表の場を設定したところ、各クラス数名の生徒が挙手をし、自分の考えを英語で伝える姿が見られるようになった。

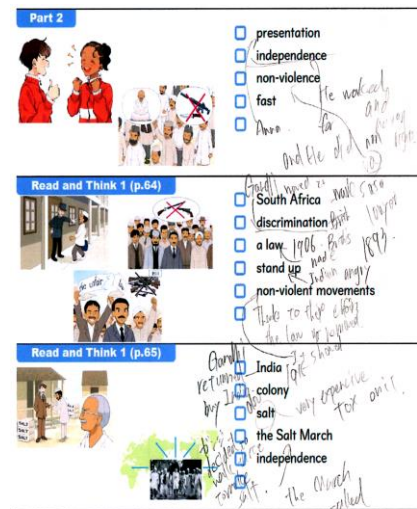
ウ <手立て 3> World Map (デジタル教科書) と教科書本文を活用した再話活動

再話活動とは、教科書や教材のテキストなどから与えられた情報を、相手に正確に分かりやすく伝えることであり、原稿を見ない状態でそのストーリーの内容を知らない人に語る活動だ

とされている。生徒同士が話し合ったり、聴き合ったりする機会を設けるために、再話活動を授業に位置づけた。

【資料 2】は、生徒が実際に教科書本文の再話活動で使用したメモの例である。デジタル教科書に付属されている「リテリングワークシート」を授業で活用した。生徒は、再話活動の事前準備として、他者に伝えるために必要だと考える単語や語句を 2 分で記入する。その際、生徒は教科書を読み直し、概要を捉えたり、必要な情報を抜き出したりした。その後の再話活動では、メモを記入した「リテリングワークシート」を用いて他者に伝える活動を行った。

【資料 2】 再話活動で使用した「リテリングワークシート」



また、教科書で扱う言語材料や語彙、題材が難しくなると、再話活動を行うことも同時に困難になることが考えられる。そのため、教科書の概要を捉える活動として、「要約ワークシート」

【資料 3】を配付して取り組ませた。レベルを 3 段階（①適切な語彙を 3 つの選択肢から選んで答えさせるもの、②語群から適切な語彙を選択して答えさせるもの、③教科書を読んで適切な語彙を書かせるもの）に分けて実施した。この活動は、すべての生徒が授業に参加することができるようにすること、さらに再話活動の足場かけとすることを目的として実施した。再話活動の事前準備に取り掛かることが難しい場合は、「要約ワークシート」を活用してもよいと伝え、生徒が自分の理解度や能力に合わせて必要なものを選択し、活動に参加できるように配慮した。

じつじり確認 (選択肢つき)

Gandhi moved to (1) a. Brazil / b. South Africa / c. Russia in 1893 to work as a (2) a. lawyer / b. farmer / c. teacher. Under British rule, Indians faced (3) a. discrimination / b. good luck / c. freedom and many (4) a. unfair / b. easy / c. fun rules, such as not walking on the (5) a. beach / b. sidewalk / c. grass. Gandhi started a (6) a. game / b. movement / c. shop and told people not to use (7) a. violence / b. money / c. salt. Many Indians were sent to (8) a. school / b. jail / c. temples, including Gandhi, but they continued. The unfair law was (9) a. removed / b. forgotten / c. sold in 1914.

しっかり確認 (語群あり)

Gandhi moved to () in 1893 to work as a ().
Under British rule, Indians faced () and many () rules, such as not walking on the ().
Gandhi started a () and told people not to use ().
Many Indians were sent to (), including Gandhi, but they continued.
The unfair law was () in 1914.

語群: unfair / 400 / Salt March / tax / sidewalk / independence / violence / countries / removed / India / salt / sea / lawyer / South Africa / discrimination / movement / jail

チャレンジ (語群なし)

Gandhi moved to () in 1893 to work as a ().
Under British rule, Indians faced () and many () rules, such as not walking on the ().
Gandhi started a () and told people not to use ().
Many Indians were sent to (), including Gandhi, but they continued.
The unfair law was () in 1914.

【資料 3】 再話活動で使用した「要約ワークシート」

World Map (デジタル教科書) では、日本や世界の建物、特産品、行事などについて 100 語程度で書かれた紹介文が掲載されている。教科書で学習する単語を用いながら、あるものを説明する英文が示されており、わかりやすい説明文を作成するための構造に気づくことができる教材であると捉え、帯活動の一つとして実施した。活動の流れを、以下に示す。

- ①ペアでテーマを選択する。(30 秒)
- ②選択したものを各自で読み、T or F に答える。(1 分)
- ③ペアで T or F の答え、日本語訳、わからない単語の意味を確認する。(1 分)
- ④音声を聞き、内容を確認する。(45 秒)
- ⑤ペアで 1 文交代による音読を行う。(1 分)
- ⑥再話の準備として、個人でメモを作成する(2 分)
- ⑦練習として内容を共有しているペアで伝え合う。(1 分)
- ⑧再度メモを作成する。(1 分)

⑨内容を知らないペアに対して再話を行う。(1分30秒)

このように、「読む」「聞く」「話す」の活動を段階的に設定することで、生徒が内容理解から表現活動へ移行しやすいように配慮した。特に、内容を共有しているペアで伝え合う活動(⑦)を行った後、再度メモを作成する時間(⑧)を確保し、新しいペアに対して再話を行う活動(⑨)につなげることで、発話への負担軽減を図った。また、英語を苦手とする生徒への足場かけとして、再話で使用可能な表現や冒頭で使用できる表現を提示した。①のテーマ選択の場面では、級友と共にどのテーマについて読むのかを楽しそうに選択する姿が見られた。自分たちの興味・関心に合った題材を選択することができ、扱う内容が既習事項や今後学習する内容と関連していたことから、前向きに取り組む姿が見られた。

(2) 検証の方法

「書くこと」「話すこと」に関する問題を4月、7月、12月に実施した。4月は学力テストの問題を、7月と12月は筆者が作成した類題に取り組ませた。

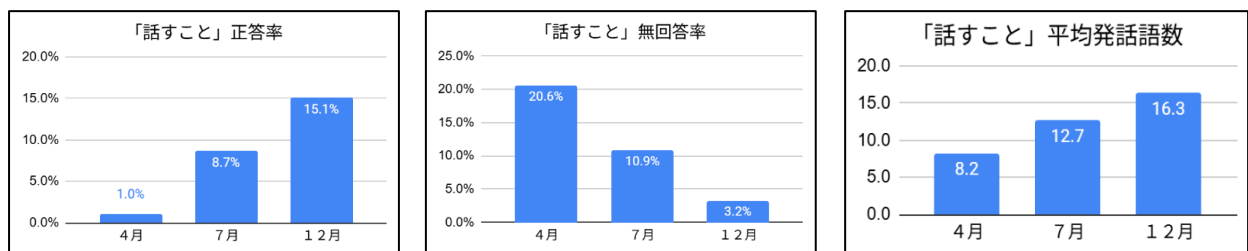
(3) 研究対象者

研究対象者は、筆者が指導している中学3年生3クラスの生徒である。学力テストの問題を4月に実施し、類似問題を7月と12月に実施した。本研究では、3回とも問題に取り組んだ生徒のデータを分析対象とした。そのため、「書くこと」は90名、「話すこと」は87名を対象とした。

4 研究の成果

(1) 「話すこと」の正答率と無回答率、発話語数の変化

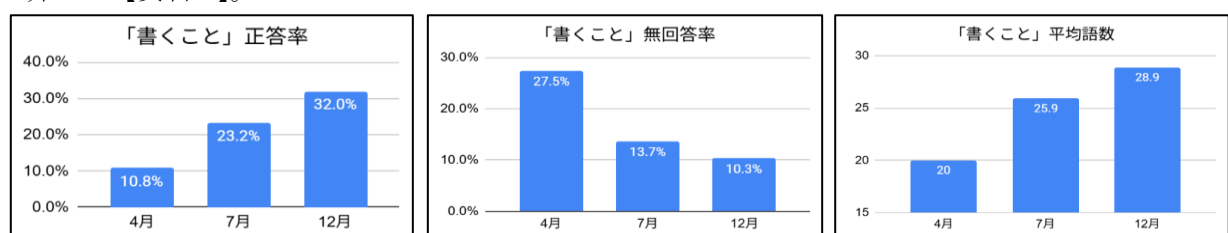
正答率は、4月から12月にかけて段階的に上昇した(4月1.0%、7月8.7%、12月15.1%)。無回答率は4月から12月にかけて減少した(4月20.6%、7月10.9%、3.2%)。特に、4月から7月にかけて大きく減少した。平均発話語数は4月から12月にかけて段階的に上昇した(4月8.2語、7月12.7語、12月16.3語)【資料4】。



【資料4】 「話すこと」の正答率と無回答率、発話語数の変化

(2) 「書くこと」の正答率と無回答率、平均語数の変化

正答率は、4月から12月にかけて上昇した(4月10.8%、7月23.2%、12月32.0%)。特に、4月から7月にかけて大きく上昇した。無回答率は、4月から12月にかけて減少した(4月27.5%、7月13.7%、12月10.3%)。特に、4月から7月にかけて大きく減少した。平均語数は、4月から12月にかけて増加した(4月20語、7月25.9語、12月28.9語)。特に、4月から7月にかけて大きく上昇した【資料5】。



【資料5】 「書くこと」の正答率と無回答率、平均語数の変化

5 考察

(1) 帯活動として行うピクチャーディスクリプション

お題の内容を教科書で扱う語彙や題材と関連付けて設定することで、生徒はそれらの語彙を教科書本文の理解場面で再度活用する機会を得ることができた。例えば、「ethical」をお題で扱った際には、It means morally good.や It means eco-friendly.といった表現が使用された。このような抽象的な語をお題として設定することで、生徒は教科書で使用されている表現に注意を向けるようになった。さらに、生徒から使用可能な表現を引き出したり、教師から明示的に英文を提示したりすることによって、インプットの質が高まり、発話に必要な言語材料の理解と使用につながる。このような継続的な取り組みによって、生徒の発話に対する心理的負担が軽減され、発話への参加が促された結果として、発話語数の向上や無回答率の減少に寄与した可能性が考えられる。

(2) 単元終末のパフォーマンス課題

発表の事前準備の段階に、生徒が作成した英文に対して教師がフィードバックを行うことは、発話不安を軽減し、自信をもって発表するための足場かけの役割を果たした。また、各単元の冒頭において教師から構造を明示した原稿を提示し、インプットの間として設定することは、聞き手に伝わりやすい文章構成や、英語表現の定着の役割を果たした可能性がある。Unit 1 から Unit 6 を通してまとまりのある自作の文章を作成し、それを正確に伝えることを目標とした取り組みを継続的に実施したことが、「書くこと」や「話すこと」の能力向上に寄与した可能性が考えられる。

(3) World Map (デジタル教科書) と教科書本文を活用した再話活動

教科書本文の再話では、内容を共有している生徒同士でやりとりを行うことで、英語を使用する練習機会が確保されるとともに、他者が用いた表現を自分の再話に取り入れることが可能となった。また、ペアで再話活動の事前準備としてメモを作成する時間を設けたことで、必要な語彙や語句、有用な言語材料を確認し、それらを取り込む機会として機能したと考えられる。World Map における再話活動では、同一内容を読んだペアで再話を練習した後、内容を知らない新しいペアに伝える場を設定した。写真を示しながらメモを参照して話す際には、概要を説明するだけでなく、聞き手に質問したり、聞き手の理解に合わせて話したりする姿が見られた。このことから、再話活動は、聞き手を意識して英語を使用する態度の育成につながったと考えられる。

6 今後の課題

課題として、「書くこと」「話すこと」とともに正答率が依然として十分に高いとは言えない点が挙げられる。「話すこと」においては、発話語数の増加や無回答率の減少、正答率の上昇といった変化が見られたものの、正答率は低い水準にとどまった(12月:15.1%)。これは、クラス内のごく一部の生徒のみが採点基準を満たす形で発話できており、多くの生徒はコミュニケーションに支障をきたすような語や文法事項等の誤りが見られるということである。全国正答率(4.2%)と比較すると一定の改善はみられるものの、中学校卒業段階で正答率がこの水準にとどまっていることを踏まえると、自分の考えを英語で表現することに困難を感じている生徒が多いことが考えられる。そのため、表現した内容を振り返る場面や、知識・技能を重視した活動とのバランスが求められる。

「書くこと」では、平均語数は増加しているものの、無回答率が10%を超えていたことから、各クラスの数名の生徒が英語を書くことに対して強い苦手意識をもっていることがうかがえる。そのため、例文を参考にしながら自分の考えを英語で書く活動を継続的に実施することを通して、「書くこと」に慣れ親しませるような活動場面の設定が必要である。